



茶を飲みながら、
ぎのわんの歴史を
のぞいてみませんか？

宇地泊からはじまる「魚の道」？

みなさんは「カミアチネー」をご存じでしょうか。頭上にバーキ(ぎる)やタライなどを載せて産物(商品)を運搬しながら売り歩く、女性の行商スタイルのことをいいます。「カミアチネー」というと宜野湾では大山の「ムムウイアングワー(山桃売り)」が有名ですが、「魚」を売り歩く「カミアチネー」の存在はご存じでしょうか。

かつて、宜野湾で唯一、半農半漁のムラで「ウミンチュ」や「イザヤー」がいた宇地泊では、漁で得た魚を漁民の家族が「カミアチネー」して、村内を売り歩いてい



▲写真1. 戦前の宇地泊の船着き場の様子
【沖縄市立郷土博物館所蔵】
この入り江に、糸満ウミンチュの船も往来していました



▲写真2. 海のウグワン(海神祭)のための魚
ウグワンの際に、揚げ魚にして供えるための魚を獲りに海へ

ました。宇地泊から始まる「魚の道」が、各地へとつながっていたのです。また、宇地泊の船着き場には糸満漁船も往来し、そこで魚を仕入れて、アチョールシンカ(商人集団)を形成し、遠くは北谷・越來、那覇首里へも販売に出かけていました。

イマイユ(生魚)以外にも、宇地泊の特徴としてヒチグワー(すずめだい類)の燻製、グルクン小などは乾魚にして売っていました。その他にも、アーサー(あおのり)を乾燥させたもの、スヌイ(もずく)やモーウイー(いばらのり)の袋詰め、シチリン(かんぎく)やハマグイ(はまぐり)などの貝類といった海産物を売り歩いていました。

今のように、スーパーもなく、自動車も普及していなかった時代、女性たちが頭上にいただいた、海からつながる「魚の道」を、各地へつなぎ、人びとの胃袋へとつなげていたのです。

※「カミアチネー」の写真などをお持ちの方は、ぜひ博物館までご一報ください。

【問合せ】
市立博物館 ☎ 870-9317



【其の46】

生まれ変わりました！

このたび、文化課が編集・発行している『ぎのわんの文化財』が、全八〇ページ・フルカラーで生まれ変わりました。

『ぎのわんの文化財』は、一九九〇(平成二)年に刊行されたガイドブックです。コンパクトでわかりやすいことから、二〇〇七(平成十九)年まで、七回にわたって版を重ねてきましたが、在庫が全てなくなり販売終了となっていました。しかし、多くの皆さまから再版の要望を寄せていただいたこと、内容に関するご意見をいただいたことから、思い切って時代に合わせたリニューアルを実施しました。

新たな『ぎのわんの文化財』は、従来収録していた二五件の文化財に加え、七版以降に登録された「神山・愛知ヌールガー」と「宇宜野湾の年中祭祀」を新たに収録しています。さらに、読みやすさを重視したデジタル版となっており、写真や解説図を豊富に盛り込んでいます。構成の工夫としては、従来は文化財の種類別に掲載していましたが、新版では文化財を所在地ごと

にまとめることで、地域ごとのまとまりが見えるようになっていきます。また、昔のくらしや文化財などを学ぶ小学生にも活用してもらえよう、小学三年生が習っていない漢字には、ふりがなを施しています。

大きく変わったのは、新たに作成した「歴史空中散歩」のコーナーです。それぞれの文化財が、各地域においてどのような風景に囲まれていたことがわかるようにしたものです。一九四五(昭和二〇)年の沖縄戦直前に撮影された空中写真に、文化財・目印となる建物・道路・家屋などを表示しました。田・畑・林などの地図記号もあるので、かつては純農村であった宜野湾の雰囲気もうかがうことができます。

販売価格は五〇〇円です。購入方法については、文化課までお問い合わせください。

【問合せ】文化課 ☎ 893-4430



▲『ぎのわんの文化財』旧版(左)と新版(右)